

第70回 令和7年8月26日（火）

「日本特有の文化について。」

夏になると「つまらないものですが」とお中元が届くことがあります。最近ではお歳暮とともに少なくなっていますが、お盆やお正月は疲れのたまりやすい季節なのでご自愛くださいという気持ちのこもった日本特有の文化だと思います。

この「つまらないもの」という表現は決して贈るほうも受け取るほうもホンネではない、いわば嘘になります。このタテマエはよく考えるとなかなか難しい日本語の特徴です。

友人のお子さんと初めて対面するとき「元気のよさそうなお子さんですね」とか「利発そうなお子さんですね」と表現することがあります。これを社交辞令といますが、この場合は発信側・受け手側とも、嘘と断定することはできません。半分程度は本当にそう感じたかもしれないし、受け手側としては正直に喜ぶことも難しい場面です。場合によっては「この人は社交辞令もわからないのか」と思われることもあります。

入院している患者さんの見舞いに行くとき大抵「元気そうで安心した」という言葉がけが見られますが、本当に元気そうな場合もあるし、相手を励ます意味で嘘をつくこともあると思います。こちらでも受け手側が察するという技術が必要になります。

「嘘は良くない」と育ってきた人も多いと思いますが、日本人の文化は上手に嘘をつくことを大切にしてきました。自分を下にする謙譲の心が人間関係を円滑にすることも多かったわけです。

この機微は教科書に書いてあるわけでもなく、日常生活で練習することが大事です。ヒーローインタビューで「自分のおかげで今日は勝った」と言う人は少ないと思います。「チームの支えがあって今日は勝利できた」と話す人がほとんどでしょう。

小さいころからAIで教育される可能性がある将来世代の子供たちはこのような言葉を学ぶ機会が減ってしまうのではないのでしょうか。0と1で答えを出すコンピューターが日本人の機微を本当に理解できるのでしょうか。

10年後にホンネしか言わない世界にならないことを願っています。ネット上の誹謗中傷は匿名性が要因ですが、謙譲の文化が育たない世界で対面でもホンネがぶつかりあう世の中になれば今より格段に生きにくい世界になってしまいます。

対面のコミュニケーションを大切にしたいと心より思います。